

□ 地方別乳兒の死亡原因 (實數)

死因	病染傳及病方地、病行流														總數										
	マ	痘	麻	百	流	コ	霍	痢	丹	流行性	破	肺	結核	腸		其	先	膿	其	病	總	脚	營	其	
臺北州	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
新竹州	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
臺中州	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
臺南州	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
高雄州	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
臺東廳	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
花蓮港廳	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
澎湖廳	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

器化消	器吸呼				器行血			器覺感及系經神				總數															
	肝	下	胃	咽	口	總	其	感	喘	肋	肺		氣	慢	急	喉	總	其	心	心	總	器	小	其	腦	腦	
肝	下	胃	咽	口	總	其	感	喘	肋	肺	氣	慢	急	喉	總	其	心	心	總	器	小	其	腦	腦	總		
腸	腸	腸	頭	腔	其	其	其	其	其	其	其	其	其	其	其	其	其	其	其	其	其	其	其	其	其	其	
硬	及	及	及	及	及	及	及	及	及	及	及	及	及	及	及	及	及	及	及	及	及	及	及	及	及	及	
化	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉
塞	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎	炎
疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾	疾
患	患	患	患	患	患	患	患	患	患	患	患	患	患	患	患	患	患	患	患	患	患	患	患	患	患	患	患
數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數	數

病身全	病染傳及病方地、病行流														總數	死因							
	其の他の全身病	營養變調の疾患	脚氣	總傳染病	其の他の流行病、地方症	膜毒及敗血症	先天性微毒	其の他の結核	腸及腹膜の結核	結核性肺炎	肺核	破傷風	流行性腦脊髄膜炎	丹毒			霍亂	コレラ	流行性感冒	百日咳	麻疹	痘疹	マラリア
七六	一〇	八六	六五	五七						一〇	九六						二八	一〇	二五	一九	六七	一〇〇〇〇	臺北州
三七		三七	八〇														一八	一〇	九七	一五	二七	一〇〇〇〇	新竹州
一八	〇	二四	一〇八	一〇六	〇六	一三	一〇	二〇	二九								一八	〇	〇	〇	二七	一〇〇〇〇	臺中州
二		二	一〇二	一〇〇	二九			〇六	〇九								〇	〇	〇	〇	二八	一〇〇〇〇	臺南州
三	〇	三	一〇二	一〇〇	三												二	一〇	二	三	二八	一〇〇〇〇	高雄州
																					二六	一〇〇〇〇	臺東廳
																					一〇	一〇〇〇〇	花蓮港廳
																					一〇	一〇〇〇〇	澎湖廳

□ 地方別乳兒の死亡原因 (千分比)

不明の診斷	死因外			乳兒	骨關節の疾患	皮膚病	蜂窠織炎及膿瘍	泌尿器の疾患	消化器の疾患	死因	
	其の他の外因死	不慮の溺死	不慮の窒息								總數
三	四			四	三			一	三	七	臺北州
一			三	八	〇			一	六	七	新竹州
二			一	九	三			二	六	五	臺中州
五	六		六	三	三			二	四	九	臺南州
二			一	三	一			一	一	四	高雄州
一				三	一					三	臺東廳
一				一	〇					一	花蓮港廳
一				一	〇					一	澎湖廳

死因	器呼吸										器行血			器覺感及系經神			總數			
	下痢及腸炎	咽頭及扁桃腺の疾患	口腔の疾患	總計	感	喘	肋膜炎	肺炎	氣管支肺炎	慢性氣管支炎	急性氣管支炎	喉頭の疾患	總計	心臟内膜炎及心筋炎	其の他の心臟の疾患	其の他の血行器の疾患		總計	小兒の抽搐子癇の疾患	其の他の腦の疾患
臺北州	三六	三五	一〇	九八	一三	一〇	八〇	八〇	五七	五七	一四六	一〇	一九	三九	一三四	七六	二八	二八	二八	二八
新竹州	一〇	一〇	一〇	二〇	八	八	八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八	二八
臺中州	九	六	六	一七	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
臺南州	一	一	一	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
高雄州	一	一	一	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
臺東廳	一	一	一	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
花蓮港廳	一	一	一	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
澎湖廳	一	一	一	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

死因	兒乳			器動運及骨			器泌尿			器消化			總數
	不慮の死	不慮の窒息	不慮の火傷	總計	骨節の疾患	關節の疾患	總計	膀胱の疾患	腎臓の疾患	總計	肝臓の疾患	肝臓の硬変	
臺北州	三	三	三	九	一	一	二	一	一	二	一	一	二
新竹州	一	一	一	三	一	一	二	一	一	二	一	一	二
臺中州	一	一	一	三	一	一	二	一	一	二	一	一	二
臺南州	一	一	一	三	一	一	二	一	一	二	一	一	二
高雄州	一	一	一	三	一	一	二	一	一	二	一	一	二
臺東廳	一	一	一	三	一	一	二	一	一	二	一	一	二
花蓮港廳	一	一	一	三	一	一	二	一	一	二	一	一	二
澎湖廳	一	一	一	三	一	一	二	一	一	二	一	一	二

### 五 生兒の身分と乳兒死亡

こゝに生兒の身分とは嫡出子、私生子の別を謂ふ。嫡出子とは配偶者間の出生である、私生子は配偶者にあらざる出生、即ち庶子と私生子とを併稱する。而して私生子には純然たる私生と、單に法律上届出の手續を完了せざる内縁關係中にある間に出生したものとの二種がある。かるが故に本島人の身分としては餘りに研究の價値に乏しいのである。我等の欲求するは純然たる私生を截然と區別して検討したい。

私生兒は先天的に體質が羸弱であるとは諸家の説くところである、即ち死産に私生子の多きを以て證左とすることが出来る。然れども私生は必しも脆弱などは限らないと想ふ、只其の結果から見て私生が多いと謂ふ論斷であるらしい。之は寧ろ母性が環境から出發して愛護を意に任せ得ざること、一面母性としての缺陷があることも考慮せなければならぬ。

今、昭和三年乃至同五年間に於ける身分別乳兒死亡の事實を展開して見ると、公生兒嫡出子は公生兒出生百中十六人の死亡に對し、私生兒は私生兒出生百中十七人を算し、差したる高低なきも私生子に死亡多きことは否定することが出来ぬ。而して兩性に依る差異は、一般死亡の傾向と同じく男を多數としてゐる。

其の詳細を掲ぐるときは、次表の通りである。

□最近三箇年間に於ける身分別出生

年	總數		嫡出		私生	
	男	女	男	女	男	女
最近三箇年平均	一、九〇五	一、八〇四	一、〇七六	一、〇七九	一、〇五九	一、〇五九
昭和三年	一、八八八	一、〇三三	一、〇三〇	一、〇三三	一、〇三三	一、〇三三
同四年	一、九〇三	一、〇六一	一、〇三〇	一、〇三三	一、〇三三	一、〇三三
同五年	一、八六九	一、〇三三	一、〇三三	一、〇三三	一、〇三三	一、〇三三
平均	一、八八八	一、〇三三	一、〇三三	一、〇三三	一、〇三三	一、〇三三

□最近三箇年間の身分別出生百中死亡

年	總數		嫡出		私生	
	男	女	男	女	男	女
最近三箇年平均	一、五八	一、二二	一、五八	一、二二	一、二二	一、二二
昭和三年	一、五二	一、一五	一、一五	一、一五	一、一五	一、一五
同四年	一、五七	一、二〇	一、二〇	一、二〇	一、二〇	一、二〇
同五年	一、五七	一、二〇	一、二〇	一、二〇	一、二〇	一、二〇
平均	一、五七	一、二〇	一、二〇	一、二〇	一、二〇	一、二〇

右表を熟察して見ると、庶子の死亡率は嫡出子のそれに比して各年甚だ低い、この現象に關しては検討の要がある。

### 六 生存期間と乳兒死亡

乳兒死亡即ち生後一歳未満者の死亡の夥多なることは上叙の如くであるが、其の生存期間別に之を観察すると、生後の期間が短かければ短いほど愈々死亡が多いのである。之は體質の充實に隨伴して死亡の漸減を見る譯である。ハウスホーフエル謂はく乳兒死亡は出生後第二月にありては第三月に四倍し、殆んど第二年及第三年の數に匹敵すると。今、最近昭和三年以降同五年に至る三箇年

間に於ける乳兒死亡の生活期間状態を見るに、先づ三箇年平均死亡数を二〇〇とし之を觀察すると、出生より十日未満の期間に於て死亡したる乳兒は總乳兒死亡の三分の一強(三六九)を占め、更に十日より一箇月未満の生命期間を有した者は九三〇を示してゐるから、滿一箇月までの死亡は約半數(四六二)に達してゐる。事實成長すべき可能性なき弱質者は天死、特に短日期に斃れるる算る儂俾だと謂ふ見方もあるが、乳兒死亡の約半數を算ふるに至つては、先天的虚弱者の自然的淘汰なりとしても過多である。

而して一箇月以上二箇月未満者八三〇を示し、夫より月日の経過に連れて遞減し、五箇月以上六箇月の者三八〇に至つて最少の死亡極限に達する。更に六箇月を超ゆると一轉して高率を呈しU字型の曲線を作すものである。乳兒の最長期である十一箇月以上一年未満者にありても、未だ四二〇を示して三箇月—四箇月生存者と同位を保つてゐる。

其の詳細を表章するときは、次表の如くである。

□乳兒死亡の生存期間 (實數)

生活期間	最近三箇年平均		昭和五年		昭和四年		昭和三年	
	總數	平均	總數	平均	總數	平均	總數	平均
總數	20115	100.0	29272	100.0	26716	100.0	20260	100.0
出生より十日未満	3242	16.1	7777	26.6	8426	31.5	11361	56.1
出生より十日以上二十日未満	11121	55.3	16277	55.7	15011	56.2	11290	55.7
出生より二十日以上二十日未満	17572	87.4	20495	70.1	17279	64.7	8679	42.8
十日以上一箇月未満	1032	5.1	1032	3.5	1032	3.8	1032	5.1
一箇月以上二箇月未満	1032	5.1	1032	3.5	1032	3.8	1032	5.1

生存期間	最近三箇年平均		昭和五年		昭和四年		昭和三年	
	總數	平均	總數	平均	總數	平均	總數	平均
二箇月以上三箇月未満	1155	5.7	1155	4.1	1155	4.3	1155	5.7
三箇月以上四箇月未満	1155	5.7	1155	4.1	1155	4.3	1155	5.7
四箇月以上五箇月未満	1155	5.7	1155	4.1	1155	4.3	1155	5.7
五箇月以上六箇月未満	1155	5.7	1155	4.1	1155	4.3	1155	5.7
六箇月以上七箇月未満	1155	5.7	1155	4.1	1155	4.3	1155	5.7
七箇月以上八箇月未満	1155	5.7	1155	4.1	1155	4.3	1155	5.7
八箇月以上九箇月未満	1155	5.7	1155	4.1	1155	4.3	1155	5.7
九箇月以上十箇月未満	1155	5.7	1155	4.1	1155	4.3	1155	5.7
十箇月以上十一箇月未満	1155	5.7	1155	4.1	1155	4.3	1155	5.7
十一箇月以上一年未満	1155	5.7	1155	4.1	1155	4.3	1155	5.7

□乳兒死亡の生存期間 (百分比)

生存期間	最近三箇年平均		昭和五年		昭和四年		昭和三年	
	平均	男	平均	男	平均	男	平均	男
總數	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
出生より十日未満	16.1	16.1	26.6	26.6	31.5	56.1	56.1	56.1
出生より十日以上二十日未満	55.3	55.3	55.7	55.7	56.2	55.7	55.7	55.7
出生より二十日以上二十日未満	87.4	87.4	70.1	70.1	64.7	42.8	42.8	42.8
十日以上一箇月未満	5.1	5.1	3.5	3.5	3.8	5.1	5.1	5.1
一箇月以上二箇月未満	5.1	5.1	3.5	3.5	3.8	5.1	5.1	5.1
二箇月以上三箇月未満	5.7	5.7	4.1	4.1	4.3	5.7	5.7	5.7
三箇月以上四箇月未満	5.7	5.7	4.1	4.1	4.3	5.7	5.7	5.7
四箇月以上五箇月未満	5.7	5.7	4.1	4.1	4.3	5.7	5.7	5.7
五箇月以上六箇月未満	5.7	5.7	4.1	4.1	4.3	5.7	5.7	5.7
六箇月以上七箇月未満	5.7	5.7	4.1	4.1	4.3	5.7	5.7	5.7
七箇月以上八箇月未満	5.7	5.7	4.1	4.1	4.3	5.7	5.7	5.7
八箇月以上九箇月未満	5.7	5.7	4.1	4.1	4.3	5.7	5.7	5.7
九箇月以上十箇月未満	5.7	5.7	4.1	4.1	4.3	5.7	5.7	5.7
十箇月以上十一箇月未満	5.7	5.7	4.1	4.1	4.3	5.7	5.7	5.7
十一箇月以上一年未満	5.7	5.7	4.1	4.1	4.3	5.7	5.7	5.7

生存期間	最近三箇年平均		昭和五年		昭和四年		昭和三年	
	平均	男	平均	男	平均	男	平均	男
八箇月以上九箇月未満	五二	四七	五三	四九	五二	四七	五二	四七
九箇月以上十箇月未満	五三	四八	五〇	四六	四九	四七	五二	四七
十箇月以上十一箇月未満	四七	四三	四七	四三	四九	四七	四七	四三
十一箇月以上一箇年未満	四三	三九	四〇	三七	四三	三八	四三	三八

七 内地に於ける乳兒死亡との比較

本島に於ける乳兒死亡は上叙のやうに出生百中十五人であるが、其の死亡度合は大體高低孰れにあるやを知らむと欲し、之を内地のそれと對照して見たい。各年に於ける出生百中の乳兒死亡の割合大正十年には本島の十六人に對し、内地は十七人を示して本島より高率であつた。然るに同十一年以降は反つて本島が累年高くなつて來た、本島にありては年に依つて多少の消長があつたが大體其の比率が減少せざるに比し、内地は大體に漸減の好勢を呈しつゝある。最近昭和五年の比率は我の十五人に對し、内地は三人の差減で十二人である。即ち内地は出生兒八人につき、本島は六人半毎に各一人の死亡がある割合である。

□乳兒死亡率内地との比較

年	本島		内地		出生百中乳兒死亡	較差(△は本島の減)
	出生百中乳兒死亡	實	出	生		
昭和五年	五二	一六〇・八六	四七	一六〇・八六	一六〇・八六	△
昭和四年	四七	一六〇・八六	四三	一六〇・八六	一六〇・八六	△
昭和三年	四三	一六〇・八六	三九	一六〇・八六	一六〇・八六	△

大正	昭和		出生百中乳兒死亡	較差(△は本島の減)
	正	和		
一〇	一五	一〇	一五	一〇
一一	一四	一一	一四	一一
一二	一三	一一	一三	一一
一三	一三	一一	一三	一一
一四	一三	一一	一三	一一
一五	一三	一一	一三	一一
一六	一三	一一	一三	一一
一七	一三	一一	一三	一一
一八	一三	一一	一三	一一
一九	一三	一一	一三	一一
二〇	一三	一一	一三	一一

更に之を生活期間に別けて見ると、生存十日未満は本島は内地より一割二分高い。十日以上一箇月未満の約二十日間は反對に内地が六・二%高いのであるが、生存一箇月以内として見るときは、十日未満の者夥多なる結果、本島は矢張り六%高いのである。一箇月以上六箇月未満の状態は本島の二六%に比し、内地は一割一分高く三七%を示してゐる。六箇月以上は再轉して本島が五%高いのである。

之を要するに、本島は生後數日で殞るゝものが多く、月餘の存命を見ると六箇月間は死亡者少く、更に後半歳は又高率を呈する傾向がある。之を表示すると次表の如くである。

□本島對内地の生活期間別乳兒死亡比較 (百分比)

生活期間	本島		内地		較差(△は本島の減)
	出生より十日未満	數	出生より十日未満	數	
出生より十日未満	一〇〇	一六六・六	一〇〇	一六六・六	一六六・六
十日以上一箇月未満	一〇〇	一六六・六	一〇〇	一六六・六	一六六・六
一箇月以上六箇月未満	一〇〇	一六六・六	一〇〇	一六六・六	一六六・六
六箇月以上一箇年未満	一〇〇	一六六・六	一〇〇	一六六・六	一六六・六

生活期間	本島	實地		較差(△は本島ノ減)
		數	百分比	
十日以上一箇月未満	九三	四〇一五八	一五五	△
一箇月以上三箇月未満	八三	三三三四	一三四	△
三箇月以上六箇月未満	五四	二二八三	八五	△
六箇月以上一箇年未満	二八	一〇五〇	一五七	△
	六三	三〇三	三三	

### 八 列國乳兒死亡の狀勢

列國に於ける乳兒死亡の推移を観察すると、明治二十三年(一八九〇年)前後は本島と同じく出生百中の割合は二〇人内外を示してゐた。即ち獨逸、ルーマニア、匈牙利、埃太利等孰れも二〇人を超過してゐたのであるが、爾來漸減状態を續け、昭和元年(一九二六年)には各國約半減を呈し、本島の如く遞増状態にあるは、其の例を見ざる所である。

今、參考資料として昭和元年以降の列國に於ける、乳兒死亡の一斑を左に掲記せむ。

□列國乳兒死亡の狀況 (出生百中一歳未満の死亡)

國	昭和元年(一九二六年)	同二年(一九二七年)	同三年(一九二八年)	同四年(一九二九年)	同五年(一九三〇年)
智利	三二	三〇	三三	三四	三四
西班牙	三八	三七	三三	三三	二七
英虞蘭及威爾斯	七〇	七〇	六五	七四	六〇
佛蘭西	九七	八三	九二	九五	七八

伊太利	獨逸	埃太利	白地	和耳	蘭威
三三	三〇	九七	三三	九七	四八
三〇	三〇	九三	三六	九三	五九
三〇	三〇	八九	二八	八七	五三
三〇	三〇	九六	?	一〇四	五九
三〇	三〇	八四	?	?	?

備考 本表中我が臺灣より高率なるは智利のみであるが、漸減の傾向は歴然として見へてゐる。

### 第四 幼兒死亡

#### 一 總 說

本島に於ける生死關係の多産多死の状態にあるは、洵に好ましからぬ現象と謂はねばならぬ。特に幼兒に於て死亡多率を示すに在りては、一層その感を深うせざるを得ない。蓋し死亡は人世に於て個人的には悲惨事の極であり、社會的には至大の損失である。

而して多産には多死の伴ふことが一般に知られてゐる所である。即ち子供が多くなるに連れ、其の養育又は愛護に十分の注意が行届かざる弊に陥るは争はれぬ事實である。ワグナーはこの事實につき實地に調査した成績に依ると正當ならずと報告してゐるが、儘に其の二因であることが窺知される。又本島農村のやうに生活態様が引締り、妊孕、育兒に關する慣習に忌むべき風あるは、これ又有形、無形に影響するところ鮮少なからざることが明である。

遮莫、幼兒の死因を観察すると、外因に依る死亡は實に寥々たる少數で、大多數は總て疾病の障礙である。之を以て社會的衛生施設を完備せしめ、疾病の發生を阻止すべく豫防衛生に努め、専ら

自然的影響に基因して避くべからざるものゝみに減少せしめなければならぬ。而して疾病を奈何にせば減少、豫防、阻止せしむべきかを研究するは緊要事である。

二 幼児死亡率

昭和元年乃至同五年の最近五箇年間に於ける一歳以上五歳未満の幼児死亡の状態を調べて見ると、以上五箇年の總死亡四五八、二五七人中一歳以上二歳未満の略稱、以下之に準ずるの死亡は四四、一八八人にして、總死亡の約一割に當つてゐる。二歳に至れば一歳の約半に遞減し二一、六〇六人(四七%)である。三歳は前二歳より更に半減となり一一、六八五人(二六%)に降り、四歳に長ずると前年より又約半減して、九四六人(二五%)に低下してゐる。この死亡状態は一歳を加ふる毎に整然として約半づゝ遞減してゐる傾向が明である。

而して以上四年間を通算すると、總死亡の約二割(一八、四%)を占めることとなり、之に一歳未満の乳兒死亡三二、一%を加へると五〇、五%、即ち總死亡の半數以上は滿五歳以下の可憐な小兒のみである。蓋し先天的に虚弱なる小兒は、却つて幼年期に解消することが純理のやうな感もするが、叙上の如く總死者の半數以上は乳幼兒だとすると、生來の幼弱者のみとは受取れない。

幼兒死亡の状況を地方別に分説して見ると、一歳の小兒死亡で全島平均位九六%より高率なるは臺中州と臺東廳とである。即ち前者は一・一〇%、後者は一・〇二%であり。臺南州は平均と同位を示し、最低位のあるは高雄州の八四%である。

二歳の死亡は臺東廳最高にして平均位(四七%)より二・一%高い、最低率を示すは臺南州の四三%であつて、之を最高臺東廳に比照するときは二・五%の低率である。新竹州は平均位と同率である。

三歳の小兒死亡は前二歳と同じく臺東廳最高にして、二歳の全島平均に匹敵し四三%を占むる高率である。最低位にあるは新竹、臺南兩州にして孰れも二三%で平均より〇三%低い。平均と同位にあるは臺北、高雄の兩州である。

四歳の小兒死亡は東海岸地方の二廳孰れも高く、北部地方の新竹、臺北の兩州は低率を示してゐる。

以上四年齡間を通じて幼兒死亡の最高位にあるは臺東廳にして平均位(一八、四%)より五・一%高く、臺中州の二〇、五%、花蓮港廳の二〇、三%之に屬してゐる。最低位にあるは高雄州の一七、〇%にして新竹州(一七、六%)は之に亞いてゐる。而して臺北州は平均位より纔かに低く、澎湖廳は高さこと〇、五%に過ぎない。

之を要するに前叙の如く一歳を長する毎に約半減しつゝ遞下するは、臺北州以下の各州にして孰れも其の揆を一にしてゐるが、廳にあつては若干の差異が認められる。今其の詳細を表示すると、次表の如くである。

□自昭和元年幼兒死亡  
至同五年

州	總死亡	一歳以上の幼兒死亡					計
		一歳	二歳	三歳	四歳	計	
全島	四五八	四二六	三三〇	二六五	一九九	一、四二〇	
臺北	八二	七七	四三	三二	二二	一七四	
新竹	五五	五〇	二五	一七	一三	一〇五	
臺中	九七	九二	四七	三六	二五	一九九	
臺東	一〇七	一〇二	五三	四一	二九	一三〇	



州	實數	百分比							總死亡	一歲以上の幼兒死亡	計
		澎湖	花蓮	臺東	高雄	臺南	新中	臺北			
澎湖	10,214	100.0							10,214	100.0	10,214
花蓮	10,214		100.0						10,214	100.0	10,214
臺東	10,214			100.0					10,214	100.0	10,214
高雄	10,214				100.0				10,214	100.0	10,214
臺南	10,214					100.0			10,214	100.0	10,214
新中	10,214						100.0		10,214	100.0	10,214
臺北	10,214							100.0	10,214	100.0	10,214
全島	10,214								10,214	100.0	10,214

□各年別幼兒の死亡

種別	總死亡	一歲以上の幼兒死亡				計
		一歲	二歲	三歲	四歲	
全島	10,214	10,214				10,214
澎湖	10,214	10,214				10,214
花蓮	10,214	10,214				10,214
臺東	10,214	10,214				10,214
高雄	10,214	10,214				10,214
臺南	10,214	10,214				10,214
新中	10,214	10,214				10,214
臺北	10,214	10,214				10,214

實數		四昭和		三昭和		二昭和		一昭和	
種別	總死亡	一歲	二歲以上	一歲	二歲以上	一歲	二歲以上	一歲	二歲以上
全島	10,214	10,214		10,214		10,214		10,214	
澎湖	10,214	10,214		10,214		10,214		10,214	
花蓮	10,214	10,214		10,214		10,214		10,214	
臺東	10,214	10,214		10,214		10,214		10,214	
高雄	10,214	10,214		10,214		10,214		10,214	
臺南	10,214	10,214		10,214		10,214		10,214	
新中	10,214	10,214		10,214		10,214		10,214	
臺北	10,214	10,214		10,214		10,214		10,214	

百分比														
五昭和			四昭和				三昭和				二昭和			
新	全	澎	花	高	新	全	澎	花	高	新	全	澎	花	高
州	州	湖	蓮	東	中	湖	蓮	東	東	中	湖	蓮	東	東
州	島	應	港	州	州	應	港	州	州	州	應	港	州	州
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
2.0	2.2	2.6	2.8	3.1	3.5	3.8	4.2	4.6	5.0	5.4	5.8	6.2	6.6	7.0
3.5	3.8	4.2	4.5	4.8	5.1	5.4	5.7	6.0	6.3	6.6	6.9	7.2	7.5	7.8
4.0	4.2	4.4	4.6	4.8	5.0	5.2	5.4	5.6	5.8	6.0	6.2	6.4	6.6	6.8
4.5	4.7	4.9	5.1	5.3	5.5	5.7	5.9	6.1	6.3	6.5	6.7	6.9	7.1	7.3
5.0	5.2	5.4	5.6	5.8	6.0	6.2	6.4	6.6	6.8	7.0	7.2	7.4	7.6	7.8
5.5	5.7	5.9	6.1	6.3	6.5	6.7	6.9	7.1	7.3	7.5	7.7	7.9	8.1	8.3
6.0	6.2	6.4	6.6	6.8	7.0	7.2	7.4	7.6	7.8	8.0	8.2	8.4	8.6	8.8
6.5	6.7	6.9	7.1	7.3	7.5	7.7	7.9	8.1	8.3	8.5	8.7	8.9	9.1	9.3
7.0	7.2	7.4	7.6	7.8	8.0	8.2	8.4	8.6	8.8	9.0	9.2	9.4	9.6	9.8
7.5	7.7	7.9	8.1	8.3	8.5	8.7	8.9	9.1	9.3	9.5	9.7	9.9	10.1	10.3
8.0	8.2	8.4	8.6	8.8	9.0	9.2	9.4	9.6	9.8	10.0	10.2	10.4	10.6	10.8
8.5	8.7	8.9	9.1	9.3	9.5	9.7	9.9	10.1	10.3	10.5	10.7	10.9	11.1	11.3
9.0	9.2	9.4	9.6	9.8	10.0	10.2	10.4	10.6	10.8	11.0	11.2	11.4	11.6	11.8
9.5	9.7	9.9	10.1	10.3	10.5	10.7	10.9	11.1	11.3	11.5	11.7	11.9	12.1	12.3
10.0	10.2	10.4	10.6	10.8	11.0	11.2	11.4	11.6	11.8	12.0	12.2	12.4	12.6	12.8

實數														
元昭和			五昭和				四昭和				三昭和			
新	全	澎	花	高	新	全	澎	花	高	新	全	澎	花	高
州	州	湖	蓮	東	中	湖	蓮	東	東	中	湖	蓮	東	東
州	島	應	港	州	州	應	港	州	州	州	應	港	州	州
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
10.0	10.2	10.4	10.6	10.8	11.0	11.2	11.4	11.6	11.8	12.0	12.2	12.4	12.6	12.8
15.0	15.2	15.4	15.6	15.8	16.0	16.2	16.4	16.6	16.8	17.0	17.2	17.4	17.6	17.8
20.0	20.2	20.4	20.6	20.8	21.0	21.2	21.4	21.6	21.8	22.0	22.2	22.4	22.6	22.8
25.0	25.2	25.4	25.6	25.8	26.0	26.2	26.4	26.6	26.8	27.0	27.2	27.4	27.6	27.8
30.0	30.2	30.4	30.6	30.8	31.0	31.2	31.4	31.6	31.8	32.0	32.2	32.4	32.6	32.8
35.0	35.2	35.4	35.6	35.8	36.0	36.2	36.4	36.6	36.8	37.0	37.2	37.4	37.6	37.8
40.0	40.2	40.4	40.6	40.8	41.0	41.2	41.4	41.6	41.8	42.0	42.2	42.4	42.6	42.8
45.0	45.2	45.4	45.6	45.8	46.0	46.2	46.4	46.6	46.8	47.0	47.2	47.4	47.6	47.8
50.0	50.2	50.4	50.6	50.8	51.0	51.2	51.4	51.6	51.8	52.0	52.2	52.4	52.6	52.8
55.0	55.2	55.4	55.6	55.8	56.0	56.2	56.4	56.6	56.8	57.0	57.2	57.4	57.6	57.8
60.0	60.2	60.4	60.6	60.8	61.0	61.2	61.4	61.6	61.8	62.0	62.2	62.4	62.6	62.8
65.0	65.2	65.4	65.6	65.8	66.0	66.2	66.4	66.6	66.8	67.0	67.2	67.4	67.6	67.8
70.0	70.2	70.4	70.6	70.8	71.0	71.2	71.4	71.6	71.8	72.0	72.2	72.4	72.6	72.8
75.0	75.2	75.4	75.6	75.8	76.0	76.2	76.4	76.6	76.8	77.0	77.2	77.4	77.6	77.8
80.0	80.2	80.4	80.6	80.8	81.0	81.2	81.4	81.6	81.8	82.0	82.2	82.4	82.6	82.8
85.0	85.2	85.4	85.6	85.8	86.0	86.2	86.4	86.6	86.8	87.0	87.2	87.4	87.6	87.8
90.0	90.2	90.4	90.6	90.8	91.0	91.2	91.4	91.6	91.8	92.0	92.2	92.4	92.6	92.8
95.0	95.2	95.4	95.6	95.8	96.0	96.2	96.4	96.6	96.8	97.0	97.2	97.4	97.6	97.8
100.0	100.2	100.4	100.6	100.8	101.0	101.2	101.4	101.6	101.8	102.0	102.2	102.4	102.6	102.8

種別	總死亡	一歲以上の幼兒死亡				計
		一歲	二歲	三歲	四歲	
臺中州	1000	106	48	25	159	
臺南州	1000	104	42	22	178	
高雄州	1000	97	40	23	160	
臺東廳	1000	98	37	23	158	
花蓮港廳	1000	99	32	20	151	
澎湖廳	1000	99	25	15	139	
昭和五年						
百分比						

三 死亡原因

死因の考察には先づ病死、變死の割合を明確にし、亞て其の病名、變死の種別を精査し、如何にせば病患を減少せしめ得る乎。如何にせば死亡比率を低下せしめ得るやを検討せなければならぬ。特に幼弱者にありては甚だ感受性に富み、外部に對する抵抗力が纖弱であるから、從つて其の影響する要因も複雑多岐に亘つてゐる。

今、保健調査地に於ける幼兒一歲以上五歲未滿の死因を観ると、外因に依る死亡は僅に一分に過ぎぬ低率であつて、疾病に因るものは九割九分の割合である。而して死因たる疾病を病名別に略叙して、疾病の分布と、死の魔手に攫はれる程度とを調べて見たい。

幼兒の主たる病死因十種に付き其の多寡を観ると、肺炎(氣管支肺炎を含む)に依るもの最多を示し、總幼兒死者の一割二分強を占めてゐる。次は腸炎(下痢を含む)の一割二分弱、第三位は胃疾の一割であつて、以上三死因を合一すると幼兒總死亡の三分の一に當つてゐる。而して乳兒(一歲未滿)死亡と

異なる點は先天性弱質(一歲以上にて本病を死因とするものもあるも、之れは死因と認めず總て不詳の疾患中に編入せしむる内規である)に依るものなさと、幼兒に固有の疾患の少數なることである。第四位は風土病の巨擘マラリアの八分強(八四%)、第五位は約七分を占むる急性氣管支炎にして、第六位よりは患者としては從來と何等擇ぶ所なきも、死者としては著しく減少したる小兒流行病の麻疹(二九%)、第七位は麻疹と大差なき腦膜炎にして、第八位以下は腎臟炎(一九%)、播搦乳兒死亡中にて略述したやうに醫生の診斷に依るもので一七%)、流行性感胃(一六%)の以上である。如上主たる十死因を合算すると幼兒死亡の六割を占め、就中消化器及び呼吸器に依るもの斷然多く、亞てマラリア、傳染病の順位をなしてゐる。

更に各歲別に依る差異を考察すると  
 「一歲」最多は各歲平均と同じく肺炎で、唯その比率が一分高いだけである。第二腸炎、各歲平均以下同じ及び第三位(胃)の疾患は各歲平均と交互に相反してゐる。而して如上三死因を合一すると一歲者總死亡の三分の一とすることは、全島平均と同揆である。又第四位(マラリア)及び第五位(急性氣管支炎)は又各歲平均と相反してゐるが、順位としての比率には大差がない。第六位(麻疹)、第七位(腦膜炎)は又相反してゐる。第八位は腎臟炎にあらずして播搦各年平均第九位である。而して第九位は各歲平均と全く其の傾向を異にして幼兒に固有の疾患である、本死因は乳兒最多死因の延長で一歲未滿直後の死因と見るべきものである。第十位は平均と同じく流行性感胃である。

「二歲」各年平均死因と全く同位の傾向を辿つて居り其の比率にあつても著差を認めない。全島各年平均は總て本二歲者の反駁であると謂ひ得る。但し本歲者の播搦、流行性感胃の二死因は全く同

数である。

〔三歳〕本歳の主死因十種は總て前二歳と同じく各年平均と同一であつて、總かに其の順位の異なるものがあるのみである。今之を圖示すると

全島各年平均順位	三歳の順位	比率の差(%)
1 肺炎	同	二・四
2 腸炎	同	(±)〇・〇
3 胃の疾患	マラリア	一・八
4 マラリア	胃の疾患	一・一
5 急性氣管支炎	同	一・四
6 麻疹	脳膜炎	一・四
7 脳膜炎	麻疹	二・一
8 腎臓炎	同	八・〇
9 瘧疾	流行性感胃	一・七
10 流行性感胃	瘧疾	〇・七

比率にありても大體著差なく、三歳に於けるマラリア、腎臓炎の兩死因が各歳平均より高率を示すに止まり、甲は一・八%、乙は八・〇%高い。

〔四歳〕四歳の主死因も順位に多少の異動あるのみで、全く病名の更迭は單に掃蕩去つて、之に腹膜炎が代つただけである。本歳の順位を擧ぐればマラリアが首位に上り、第二位の腸炎、第五位の急性氣管支炎、第十位の流行性感胃は依然として全歳平均と同じく、又其の比率にありても大差がない。第三位は肺炎、第四位は胃の疾患、第六位腎臓炎、第七位麻疹、第八位は脳膜炎、第九位が腹膜炎である。如上のやうに各歳平均との著差を認めたるは首位のマラリアに限り、其の他の死因は二位以内の異動に過ぎない。

〔統計的觀察〕幼児の死亡原因は比較的複雑化し、此の間何等即する所なき觀を呈するのであるが、其の歸嚮を熟察すると、各年の死因と、其の比率が秩序ある相遷の常型を保つてゐる。即ち一歳者は〇歳と近似の傾向をとり、又四歳は五歳以上と共通する觀がある。而して前四歳間の死因十種の中九種までは共通で、二歳と三歳とは全く同型であり、其の前後は僅に唯一種のみ例外をなしてゐるのみである。即ち一歳は共通死因腎臓炎に代つて幼児に固有なる疾患となり、又四歳に在りては共通死因瘧疾に代るに腹膜炎を以て充てたのみであつた。則ち知る自然的現象には何等の規則もなく、又常軌もないやうであるが、かく多數を蒐めて見ると茲に律すべき規則が生れて來ることは實に不可思議の感を懐かしめるが、之は自然的天則であつて、所謂る物あれば則ちありの鐵案である。衛生の局に當るものは須らくこの法則を考察して、幼児死亡の歸趨に鑑み、之が對策施設の衝に就かれないのである。

□ 幼児の主たる死亡原因

(四年齡の平均最多の順位。各歳の比率上にあるアラビア數字は順位)

死因順位	實數				千分比			
	總數	一歳	二歳	三歳	總數	一歳	二歳	三歳
1 肺炎	200	25	33	27	(1)	23.8	33.5	(1)
2 下痢及腸炎	155	35	33	26	(2)	23.5	29.5	(2)
3 胃の疾患	133	25	17	23	(3)	23.5	29.5	(3)
4 マラリア	120	16	17	14	(4)	23.5	29.5	(4)

死因順位	實數				千分比			
	總數	一歲	二歲	三歲	總數	一歲	二歲	三歲
5 急性氣管支炎	1,000	1,000	1,000	1,000	100.0	100.0	100.0	100.0
6 麻疹	300	300	300	300	30.0	30.0	30.0	30.0
7 腦膜炎	200	200	200	200	20.0	20.0	20.0	20.0
8 腎臟炎	150	150	150	150	15.0	15.0	15.0	15.0
9 肺結核	100	100	100	100	10.0	10.0	10.0	10.0
10 流行性感冒	80	80	80	80	8.0	8.0	8.0	8.0
11 腹膜炎	70	70	70	70	7.0	7.0	7.0	7.0
12 幼兒に固有の疾患	60	60	60	60	6.0	6.0	6.0	6.0

幼兒各歳の最多死因に編入したる十二疾患の外に、各歳を侵掠してゐる死因を甄別して見ると十二種を算ふることが出来る。即ち(1)百日咳、(2)デフテリア、(3)肺結核、(4)先天性梅毒、(5)脚氣、(6)腦出血、(7)心臟病、(8)慢性氣管支炎、(9)肋膜炎、(10)喘息、(11)脱腸、(12)肝臓硬化の以上である。更に或る一歳には發現せざるも、其の他の三歳間に死者を出した死因を掲ぐると十一種に上つてゐる。即ち(一)病因としては赤痢、流行性腦脊髄膜炎、破傷風、腹膜結核、悪性腫瘍、扁桃腺炎、十二指腸蟲病、蟲様突起炎及び先天性弱質の九種と(二)外因としては不慮の窒息及び不慮の溺死の二種である。

以上死因の各歳平均比率の最多は一割二分強を示してゐるが、若し不明の診断として葬らるゝもの一割一分てふ最多死因に匹敵する大數を吟味するときは、各死因比率は幾分の増率を見る譯である。尙、この増率の按排は各死因に均霑することも察知することが出来る。果して各死因一齊に増

率するものとせば比率としては上昇するが、其の多寡の順位には概して變動を與へざることも推知せられるから、死因の検討には些の故障も認められない。而して不明の診断に依る比率は年齢の長するに従つて増加してゐる、即ち一歳の一割を低位とし、逐次上騰して四歳の一割二分に達してゐる。

□ 疾病別幼兒の死亡

死因	實數				千分比			
	總數	一歲	二歲	三歲	總數	一歲	二歲	三歲
總數	1,000	1,000	1,000	1,000	100.0	100.0	100.0	100.0
マヤ病	100	100	100	100	10.0	10.0	10.0	10.0
痘疹	300	300	300	300	30.0	30.0	30.0	30.0
麻疹	200	200	200	200	20.0	20.0	20.0	20.0
百日咳	150	150	150	150	15.0	15.0	15.0	15.0
デフテリア	100	100	100	100	10.0	10.0	10.0	10.0
流行性感冒	80	80	80	80	8.0	8.0	8.0	8.0
コレラ	70	70	70	70	7.0	7.0	7.0	7.0
赤痢	60	60	60	60	6.0	6.0	6.0	6.0
丹毒	50	50	50	50	5.0	5.0	5.0	5.0
流行性腦脊髄膜炎	40	40	40	40	4.0	4.0	4.0	4.0
疑似傷風	30	30	30	30	3.0	3.0	3.0	3.0
破傷風	20	20	20	20	2.0	2.0	2.0	2.0

死因	實數				千分比					
	總數	一歲	二歲	三歲	四歲	總數	一歲	二歲	三歲	四歲
肺核性腦膜炎	5	7	10	3	3	70	2	1	1	1
結核性腦膜炎	5	7	10	3	3	70	2	1	1	1
腸及腹膜の結核	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1
結核性淋巴腺炎	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1
其他の結核	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1
先天性梅毒	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1
膿毒及敗血症	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1
其他の流行病、地方病、傳染病	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1
總數	33	41	52	33	33	100	100	100	100	100
全身病	27	33	41	27	27	85	85	85	85	85
脚氣	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1
惡性腫瘍	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1
營養變調の疾患	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1
其他の全身病	24	30	38	24	24	75	75	75	75	75
總數	27	33	41	27	27	85	85	85	85	85
神經系及感覚器	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1
腦出血及腦軟化	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1
其他の腦の疾患	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1
小兒の搐搦及子癇	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1
其他の神經系及感覚器の疾患	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1
總數	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1
血管	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1
心臟内膜炎及心筋炎	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1
其他の心臟の疾患	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1
其他の血管の疾患	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1
總數	1	1	1	1	1	10	1	1	1	1

死因	實數				千分比					
	總數	一歲	二歲	三歲	四歲	總數	一歲	二歲	三歲	四歲
急性氣管支炎	17	23	30	17	17	50	50	50	50	50
慢性氣管支炎	9	11	14	9	9	27	27	27	27	27
氣管支肺炎	8	10	13	8	8	24	24	24	24	24
肺肺炎	200	250	320	200	200	600	600	600	600	600
肋膜炎	2	3	4	2	2	6	6	6	6	6
感冒	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
其他の呼吸器病	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
總數	211	279	363	211	211	630	630	630	630	630
口腔の疾患	2	3	4	2	2	6	6	6	6	6
咽頭及扁桃腺炎	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
胃の疾患	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
下痢及腸炎	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
十二指腸蟲病	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
寄生蟲病	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
蟲癩突起炎	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
脫腸及腸管閉塞	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
肝臟の硬化	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
肝臟の疾患	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
脾臟の疾患	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
黃胆	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
其他の消化器病	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
總數	11	14	18	11	11	33	33	33	33	33
泌尿器	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
膀胱の疾患	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
腎臟の疾患	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
其他の泌尿器病	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3
總數	3	4	5	3	3	9	9	9	9	9
總數	214	293	381	214	214	669	669	669	669	669

死因	一 實		千		分		比
	總數	一歲	平均	一歲	二歲	三歲	
皮膚蜂癩炎	16	15	3.9	5.1	2.6	2.7	
皮膚疥癬	11	11	2.8	4.0	2.6	2.7	
皮膚癩	2	2	0.5	0.7	0.5	0.5	
骨節の疾患	2	2	0.5	0.7	0.5	0.5	
その他の運動器病	7	7	1.8	2.5	1.8	1.8	
先天性弱質	1	1	0.2	0.3	0.2	0.2	
出生後産兒の傷害	1	1	0.2	0.3	0.2	0.2	
其他の幼児に固有な疾患	1	1	0.2	0.3	0.2	0.2	
總計	26	26	6.6	9.1	6.6	6.6	
外死	1	1	0.2	0.3	0.2	0.2	
不慮の窒息	1	1	0.2	0.3	0.2	0.2	
不慮の中毒	1	1	0.2	0.3	0.2	0.2	
不慮の溺死	1	1	0.2	0.3	0.2	0.2	
其他の外因死	1	1	0.2	0.3	0.2	0.2	
不明の診断	1	1	0.2	0.3	0.2	0.2	

### 第五 乳幼児死亡

#### 一 總死亡より觀たる乳幼児死亡

死亡統計を繙くまでもなく、乳幼児(五歳未満者)に死亡高率なるは、其の身體の充實せざるため生  
 活力の脆弱なる結果内因、外因に對する抵抗力が甚だ脆弱であるからである。之に依り先づ榮養に

留意して健康を保持増進せしむることが専一である。次に疾病に注意することが肝要である。茲に  
 研究を要するは乳幼児は勿論高率なるは免れざるも、如何にせば低減し得るやにあるのである。茲に  
 今、最近昭和元年乃至同五年に於ける五箇年間の乳幼児死亡を檢覈して見ると、昭和元年には總  
 死亡九〇、五四一人中四三、三四〇人は乳幼児の死亡であつたから、總死亡の四八〇に當つてゐる。次  
 て同二年には五〇〇に上り、同三年には更に増加して五三〇の高率を示してゐる。超へて同四年は  
 僅に減少して五〇〇に下降したのであるが、同五年には再轉上昇して五三〇の新記録を作つた。昭  
 和三年の五三〇は四拾五入の結果にて實は五二六であつた。

乳幼児の状態を更に各歳に剖折して見ると、増加の趨向を呈してゐるは一歳未満の乳兒に限つて  
 るて、其の他の各歳は大體に於て遞減の傾向を辿つて來てゐる。即ち〇歳は昭和元年の三〇〇より  
 遞加して同五年には三五〇に上騰してゐる。この状態に當面しては全く乳兒保護の聲を強調せず  
 は居られない。

内地に於ける乳幼児死亡の状態を一瞥するに、著しく相乖戻してゐるものがある。先づ乳兒死の  
 状況を見るに、本島の三五〇に對し内地は二二〇の低率である。而かも昭和元年に比照すると三〇  
 の減少である。五歳以下(一歳以下の乳兒を含む)の最近昭和五年の比率を調べて見ると三五〇を示  
 してゐて、恰度本島の一歳以下乳兒死亡と伯仲してゐる。

殊に晩近乳幼児の死亡状態を觀察するに、列國は勿論、内地に在りても逐年減少の好傾向を示す  
 に反し、獨り本島は寧ろ比年高騰しつつあるは、單なる衛生問題として過眼することが出来ぬ、重  
 要なる社會醫學上の問題として母性並に小兒の保健問題として高調せざるを得ない。

次に内地に於ける乳幼児死亡率との比較を掲ぐべし。

□本島對内地の總死亡百中乳幼児死亡の割合 (五歳以下には一歳以下を含む)

年	本島		内地		本島の差	
	一歳以下	五歳以下	一歳以下	五歳以下	一歳以下	五歳以下
昭和元年	三〇・一	四八・八	三三・九	三六・八	三・八	一・〇
同二年	三三・三	四九・七	三二・二	三七・七	一・一	二・〇
同三年	三三・八	五二・六	三二・六	三七・七	一・二	三・〇
同四年	三三・〇	五〇・四	三三・四	三七・二	一・六	一・五
同五年	三三・〇	五二・〇	三三・二	三七・五	一・八	一・五

乳幼児死亡の體性に依る影響は興味ある問題である。從來死亡は一般に男を多數とするは周知の事實であるが、乳幼児死亡にありては直に男を多數だとは謂はれぬ。即ち最近五箇年昭和元年乃至同五年の總死亡百中の平均割合に徴すれば女兒を高率としてゐる。即ち男四九八〇に對し、女は男より一八〇高く其の比率五一・六〇を示してゐる。之を各年の事實に觀るも同調を呈して、女の低率なるを認めなす。

然れども、之を乳兒と幼兒とに區分するときは、乳兒は例年男を多數とするに反し、一歳以上五歳未滿の四年は各年孰れも女を多數としてゐる。乳兒期に男の多死なるは一般に知られてゐて、女は先天的に恵まれたる影響だと結論するところであるが、幼兒に於て女の却て多死なるは討究に値すべき問題である。元來女の體格が男に優れてゐないことは否むことが出来ぬ、然れども乳兒期に女の死亡寡きは、近親擧つて娟々乎たる女性の故を以て、一層勞はり愛憐する結果、即ち最善の

配意に依るものと解せらる。而して誕生期を經過し屋外遊戯等を爲す時期に至ると、生來花車なる女兒であるから、男兒に比して二疊に胃され易いことも思惟せられる。(次項の「體性と乳幼児死亡參照」例に依り本項に關する統計を集録するときは、次の如くである。

□最近五箇年の總死亡と乳幼児死亡 (本島)

年及體性	總死亡	乳				幼				兒				死			
		總數	〇歳	一歳	二歳	一歳	二歳	三歳	四歳	一歳	二歳	三歳	四歳	一歳	二歳	三歳	四歳
平五箇均年	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三
昭和元年	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三
同二年	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三
同三年	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三
同四年	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三
同五年	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三	二,〇三三



最近五箇年に於ける總死亡百中の割合

年及體性	平五箇年均年總		昭和元年總		同二年總		同三年總		同四年總		同五年總	
	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男
總數	506	506	478	478	478	478	478	478	478	478	478	478
〇歳	331	331	331	331	331	331	331	331	331	331	331	331
一歳	87	87	87	87	87	87	87	87	87	87	87	87
二歳	47	47	47	47	47	47	47	47	47	47	47	47
三歳	47	47	47	47	47	47	47	47	47	47	47	47
四歳	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26
五歳	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15

二 體性と乳幼児死亡

一般死亡は男を多數としてゐる、又乳兒一歳未満死亡も亦一般死亡と同しく男を多數とするが、幼兒一歳以上五歳未満死亡は之に反して女を多數としてゐる。今昭和元年乃至同五年の平均小兒死

亡率を各年齢間の所謂年齢別人口に對比して見ると、一歳未満者千人中男は三百十九人、女は三百五十五人に當り、男兒は三人、女は四人毎に各一人の夭死を出してゐる割合である。然るに一歳を長したる一歳以上二歳未満者になると男の六七%に對し、女は男よりも六%高く七三%を示してゐる。二歳以上三歳未満は更に男女の較差を大ならしめて、女は一〇%の高率を呈して來る。三歳以上四歳未満は四%、四歳以上五歳未満は二%の差を以て、孰れも女を高率としてゐる。而して五歳未満者全部の比率は男八三・八%を示し、女七七・三%に比して六・五%高い。

之を要するに五歳未満者の死亡は男を多數としてゐるが、各歳の状態は〇歳のみ男高く、其の他の四年齡は孰れも女を高率としてゐる。之は女は稟性として男に比し體質の纖柔なるに由るものならむ。

如上の傾向は内地に在りても同型である、而して本島に於て女兒を高率とする一因と認むべきは、慣習に依り養子(媳婦仔)の例制度の弊に基因することが多い。

更に乳幼兒死亡の性別多寡を方面を換へて觀察して見ると、如上五箇年平均の女兒一〇〇につき男兒死亡の割合は〇歳は一・二七にて男二割七分高く、一歳にありては九四を示して男の低率を見二歳は七九に當り、男の比率が著しく低下して來るのである。其の詳細は次表の如くである。

□人口千につき死亡並に女百につき男

年及體性	平五箇年均年總		〇歳		一歳		二歳		三歳		四歳		五歳	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
總數	506	506	331	331	87	87	47	47	47	47	26	26	15	15

年及體性	五箇年		昭和元年		同二年		同三年		同四年		同五年	
	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男
總數	110	105	115	110	120	115	125	120	130	125	135	130
〇歳	15	12	18	15	20	18	22	20	25	22	28	25
一歳	18	15	20	18	22	20	25	22	28	25	30	28
二歳	20	18	22	20	25	22	28	25	30	28	32	30
三歳	22	20	25	22	28	25	30	28	32	30	35	32
四歳	25	22	28	25	30	28	32	30	35	32	38	35
五歳	28	25	30	28	32	30	35	32	38	35	40	38

三 乳幼児の疾病と死因  
 五歳未満の乳幼児に於ける疾病状態を保健調査の成績に徴して見ると、寄生蟲卵保有者とトラホ

ム患者とか斷然多數を占めて、前者は該小兒の半數以上を占めて五八%、後者は一七%を示してゐる。元來この二疾は直接死の轉歸を見ざるに依り、死亡に對比するは妥當を缺く嫌がある。次に多數なる疾病は脾腫の八%、マラリアの五%、急性氣管支炎及び貧血の二%等が主なるものであつて、乳幼児死因を多數とするは如上疾病中マラリアと急性氣管支炎の二種のみである。

疾病の多數なるものに貧血なる病名があつて、其の病因の那邊にあるや知了し難いのである。即ち急性貧血なるか、又は白血病其の他の貧血なるかが不明である。最も保健調査のやうに多衆の住民に對して檢診する場合には貧血の因由まで實際に調べ得ない、而し衛生狀況の不良なる部落に於ける貧血は多分寄生蟲病特に十二指腸蟲に因るものと、マラリアに由るものとが多數なることだけは想像に難くない。

結局、疾病調査の結果と小兒死因とを考察するも大なる因果關係を見出し得なかつた。而しながら本島に於ける乳幼兒の鬼籍に入るは如上疾病調査より見て慢性的なるは僅にマラリア、氣管支炎程度のもので、其の他は急激に侵襲する疾患であることが證明せられたのである。乳幼兒に共通の最多死因である肺炎、胃の疾患、腸炎(下痢を含む)などの多くは急性的のもので推知するのが妥當である。

由是觀之、乳幼兒の疾患は初期にあつて十分の療養を講せざれば不測の轉歸を招來することが明かる。

次に保健調査に依る五歳未満の疾病統計を掲げて、本項を擱かん。

□五歳未満者の疾病

疾病	検査人員		総数		千数		男分		女比	
	總	實	男	女	男	女	男	女	男	女
總患	11110	11110	5555	5555	11041	11041	11041	11041	10000	10000
麻疹	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
百日咳	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
肺炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
先天性梅毒	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
遺毒	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
總數	11110	11110	5555	5555	11041	11041	11041	11041	10000	10000
全身病	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
脾腫	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
甲狀腺腫	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
營養疾患	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
總數	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
腦膜炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
腦水腫	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
其他の神経系病	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
其他の病	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
血液病	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
淋病	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
其他の血行器病	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
總數	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
心臓病	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
心臓瓣膜病	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
總數	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
呼吸器病	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
急性氣管支炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
慢性氣管支炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
毛細氣管支炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
氣管支肺炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
肺肺炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
肋膜炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
喘息	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
感冒	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
其他の呼吸器病	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
總數	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
消化器病	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
腸加答兒	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
其他の胃疾	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
胃擴張	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
消化不良	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
胃加答兒	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
扁桃腺炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
口腔炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
顎下腺炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
總數	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556

疾病	検査人員		総数		千数		男分		女比	
	總	實	男	女	男	女	男	女	男	女
總患	11110	11110	5555	5555	11041	11041	11041	11041	10000	10000
血液病	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
淋病	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
其他の血行器病	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
總數	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
心臓病	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
心臓瓣膜病	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
總數	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
呼吸器病	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
急性氣管支炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
慢性氣管支炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
毛細氣管支炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
氣管支肺炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
肺肺炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
肋膜炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
喘息	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
感冒	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
其他の呼吸器病	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
總數	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
消化器病	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
腸加答兒	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
其他の胃疾	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
胃擴張	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
消化不良	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
胃加答兒	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
扁桃腺炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
口腔炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
顎下腺炎	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556
總數	1111	1111	555	556	555	556	555	556	555	556

疾病	總數		千分		女比
	男	女	男	女	
腸炎	16	10	0.6	0.4	0.6
寄生蟲病	8	5	0.3	0.2	0.3
黃胆	1	1	0.0	0.0	0.0
肝臟肥	1	1	0.0	0.0	0.0
腸水	7	3	0.3	0.1	0.3
其他の消化器病	5	3	0.2	0.1	0.2
總數	45	25	1.8	1.0	1.8
泌尿器	1	1	0.0	0.0	0.0
腎臟炎	1	1	0.0	0.0	0.0
其他の泌尿病	1	1	0.0	0.0	0.0
總數	2	2	0.0	0.0	0.0
皮膚病	1	1	0.0	0.0	0.0
疥癬	1	1	0.0	0.0	0.0
蜂蟻	1	1	0.0	0.0	0.0
癩	1	1	0.0	0.0	0.0
水痘	1	1	0.0	0.0	0.0
總數	5	5	0.2	0.2	0.2
運動器	1	1	0.0	0.0	0.0
關節炎	1	1	0.0	0.0	0.0
畸形	1	1	0.0	0.0	0.0
發育不良	1	1	0.0	0.0	0.0
其他の皮膚病	1	1	0.0	0.0	0.0
總數	5	5	0.2	0.2	0.2
幼兒疾患	1	1	0.0	0.0	0.0
總數	1	1	0.0	0.0	0.0

四 季節と乳幼児死亡

人類に季節の影響あるは、既に妊孕時にありても知るところである。まして死と四季寒暖の相關關係にあつては一層密接の關係にあるは當然である。例へば消化器傳染病、脚氣、腦膜炎、乳兒の消化不良等は夏期に特發し、又急性小兒傳染病の内デフテリア、猩紅熱、其他の呼吸器病の肺炎、急性氣管支炎等は冬季に多いことである。

而して死亡は一般に各地とも酷暑、嚴寒に於て多率と謂はれてゐる。本島に於ては四季の分界が截然としてゐないが、北半球にありては概ね三、四、五の三箇月を春とし、以下之に倣つて十二、一、二の三箇月を冬としてゐる。

現行の季節に依る觀察は總て月別を使用してゐる。而かも各月は日數の同じからざる結果、三十一日の大の月は、二十八日、二十九日又は三十日の月よりも、日に於て多き關係上又死亡多きは明である。故に各月の實數は眞の多寡を示したものでない、即ち一年平均一日死亡數を算出してから、其の多寡を知るべきである。

今、本島に於ける乳幼児死亡を全年を通じて一日平均百人宛とし、之を各月の一日平均數を見て、一日百人以上の月を多數とし、之に反する百人以下の月を少數とする比較法である。

右に依ると、七月は一一四人を示し全年中の最高である、八月の一一七人、六月の一一三人相亞いて高率に屬する。最低の首なるは三月の七六人、亞いて四月の八〇人、二月の八六人等である。之を要するに乳幼児死亡は全く氣温の影響に支配せられてゐる。今全年の平均氣温を観るに乳幼兒死亡の最多である七月は二七七度(攝氏以下同)を示して最高である、亞て乳幼兒死亡の高き八、六の兩月の氣温は之に亞いて高いのである。氣温として最低なるは二月の一六七度、二月の一七二度、十